
 ニ ュ ー ス

日本の火山活動概況（2009年3月～4月）

気象庁



図 1. 2009年3月～4月に目立った活動があった火山

雌阿寒岳（43°23'12"N, 144°00'32"E）

ボンマチネシリ 96-1 火口からの噴煙は、2008 年 11 月の噴火前に比べてやや多い状態で推移したが、次第に弱まってきている。火山性地震は 1 月以降減少傾向となり、4 月は一日当たり数回程度で推移した。震源は概ねボンマチネシリ火口付近の浅い所に分布し、これまでと比べて特に変化はなかった。また、継続時間の短い振幅の小さな火山性微動の発生は少なく、3 月下旬以降は発生しなかった。

4 月 7 日に陸上自衛隊第 5 旅団、4 月 17 日には北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、ボンマチネシリ 96-1 火口の噴煙活動は、前回の観測（2009 年 1 月）に比べて噴煙の勢いが弱まっていた。また、火口周辺に新たな火山灰等の噴出物や、地熱域の拡大は認められなかった。ボンマチネシリ第 4 火口からの噴煙は非常に弱い状態で、その他の火口（赤沼火口、北西斜面 06 噴気孔列、中マチネシリ火口等）の状況には特段の変化はなかった。

GPS による地殻変動観測では、2008 年 10 月初め頃よりやや広域の地殻変動が認められているが、浅部の膨張を示す地殻変動は認められていない。

草津白根山（36°37'22"N, 138°31'55"E）

地震活動や地殻変動には特段の変化はなかった。

湯釜火口内の北壁では、2006 年まで高温部分は認められなかったが、2008 年 7 月の調査で高温部分が確認され、新たな噴気が見つかった。また、同年 5 月及び 10 月の調査で、湯釜火口北方の北側噴気地帯と水釜北東斜面にある噴気地帯の間に、新たな噴気を確認されるなど、熱活動の高まりが認められている。

浅間山（36°24'23"N, 138°31'23"E）

山頂火口では、3 月 15 日 23 時 48 分頃、4 月 14 日 07 時 32 分頃及び 4 月 30 日 20 時 02 分頃にごく小規模な噴火が発生した。いずれも、現地調査で山麓に降灰は確認されなかった。

火山性地震は、山頂火口直下のごく浅い所で発生したと推定される低周波地震のやや多い状態が続き、振幅の小さな火山性微動もやや多い状態で推移した。また、2 月 2 日の小規模噴火発生前にみられた、周期の短い火山性地震の増加はなかった。傾斜計では、火口直下浅部へのマグマ上昇を示す変化は観測されていない。

3 月 31 日に群馬県の協力により実施した上空からの観測では、山頂火口内では噴煙が充満し、火口底の状況は確認できなかったが、火口周辺に新たな噴出物は認められなかった。また、4 月 22 日に陸上自衛隊の協力により行った上空からの観測では、山頂火口内の火口底中央部とその周辺に高温領域が引き続き認められるなど、依然として熱活動の高まった状態が続いていた。

COMPUSS を用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中 8 回実施）では、一日あたり 1,000～3,600 トンと、依然として多い状態であった。2 月 2 日の噴火前後に比べると、3 月以降、放出量は減少しているが、2008 年 7 月以前と比べ、引き続き多い状態で推移した。また、夜間には高感度カメラにより微弱な火映が時々観測されたが、3 月以降、火映の出現頻度は低下した。

山体周辺の GPS 連続観測では、一部の基線で 2008 年 7 月初め頃からわずかに伸びる傾向が、引き続きみられた。光波測距観測では、2008 年 8 月頃から山頂と山麓の観測点（山頂から南南東 7km）の間が縮む変化はやや鈍化している。

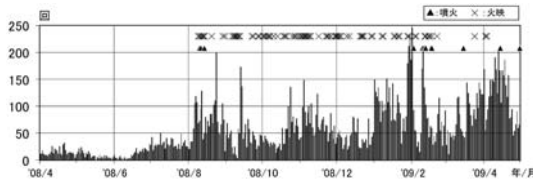


図 2. 浅間山 火山性地震の日回数 (2008年4月1日～2009年4月30日)

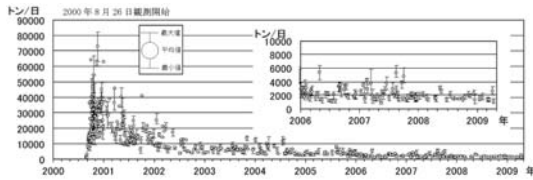


図 3. 三宅島 火山ガス (二酸化硫黄) 放出量の変化 (2000年8月～2009年4月)

三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

4月1日16時17分頃、山頂火口でごく小規模な噴火が発生し、灰色の噴煙が火口縁上600mまで上がった。直後に行った現地調査では、山頂火口から東側約3kmの山麓で微量の降灰が確認された。また、同月18日01時06分、振幅の大きなやや低周波地震(約3～10Hzが卓越する地震)が発生した。直後の調査で、島の南東から南側にかけての山麓で、ごく微量の降灰が確認されたことから、地震発生と同時に噴火が発生したと推定される。

島内で実施した、COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中4回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり800～3,200トンと、依然として多量の火山ガス放出が続いた。また、三宅村の火山ガス濃度観測では、山麓で高濃度の二酸化硫黄が時々観測されている。

火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。発生した地震のほとんどがやや低周波地震で、高周波地震(約10Hz以上が卓越する地震)も時々発生した。震源はいずれも山頂火口直下浅部と推定される。また、火山性微動も時々観測された。

山頂火口からは白色の噴煙が火口縁上100～300mで推移した。

全磁力観測では、火口直下の熱帯磁が鈍化しながらも続いている。

GPS連続観測では、山体浅部の収縮と深部の膨張が継続している。

硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E)

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、地震活動は落ち着いた状態で経過した。国土地理院の観測によると、2006年8月以降見られている島全体が隆起する地殻変動は継続している。

福德岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)

3月19日に海上保安庁海洋情報部が上空から行った観測では、福德岡ノ場付近の海面で、火山活動によるとみられる変色水が確認された。また4月21日に海上自衛隊が上空から行った観測では、福德岡ノ場付近の湧出点付近で気泡を伴う青白色および乳白色の変色水が確認され、そこから西方向に幅約90m、長さ約900mの黄褐色および青緑色の変色水が確認された。いずれも火山活動によるものとみられる。福德岡ノ場付近では、これまでも長期にわたり、火山活動によるものとみられる変色水等が確認されている。

阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))

中岳第一火口では、南側火口壁の噴気孔からごく微量の火山灰噴出が時々確認された。夜間に行った現地調査では、同噴気孔から火災現象が時々確認された。

中岳第一火口の湯だまりの量は9割で経過し、表面温度にも大きな変化はなかった。

孤立型微動は一日あたり60～150回で推移した。火山性微動の発生はなかった。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中6回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり200～700トンと少ない状態で経過した。

桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

昭和火口では、3月から4月にかけて95回噴火が発生し、うち64回が爆発的噴火であった。これらの爆発的噴火で、大きな噴石が度々飛散した。3月10日05時22分の爆発的噴火では、大きな噴石が最長で2回目(昭和火口より2km付近)まで達した。また、4月9日の爆発的噴火では、大きな噴石が、4回目(昭和火口から800m～1,300m)まで飛散し、噴煙が火口縁上4,000mを超えて南西方向へ流れ、火砕流は昭和火口の東側約1kmの範囲に流下した。同日行った現地調査では、薩摩半島の広い範囲で降灰が確認された。

南岳山頂火口では噴火が3回発生し、ごく小規模な噴火も時々発生した。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中3回実施)では、一日あたり400～2,600トンで経過した。

火山性地震及び火山性微動は少ない状態で経過している。

国土地理院の GPS 連続観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部へのマグマ注入による膨張が続いている。

薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動は依然としてやや活発な状態が続いており、噴煙高度は火口縁上概ね 200m で推移した。4 月 27 日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、硫黄岳山頂火口から、断続的に白色の噴煙が上がっているのが確認された。

火山性地震はやや多い状態が続いている。発生した地震の多くが B 型地震で、A 型地震も時々発生した。また、火山性微動も時々観測された。

口永良部島 (30°26'36"N, 130°13'02"E (古岳))

GPS 連続観測では、2008 年 9 月以降、新岳火口浅部の膨張を示す変化が観測されていたが、2009 年 2 月以降は鈍化している。3 月 23 日に行った現地調査では、2009 年 1 月以降、新岳山頂火口南側の熱異常域の分布に特段の変化はなかった。3 月 25 日に実施した、COMPUSS を用いたトラバース法による火山ガス観測では、一日あたりの二酸化硫黄の平均放出量は概ね 100 トンと、2009 年 1 月以降やや減少していた。

火山性地震及び火山性微動は、少ない状態で推移した。

遠望カメラ（新岳火口の北西約 3 km）による観測では、新岳火口から火口縁上概ね 100 m の噴煙が時々確認され、4 月 19 日には、火口縁上 400 m に達するなど、噴煙活動はやや高まった状態が続いている。4 月 27 日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測でも、新岳火口から白色の噴煙が断続的に上がっているのが確認された。

諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

爆発的噴火が時々発生したほか、小規模な噴火も時々発生した。地震活動は、B 型地震がやや多い状態で推移した。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm

(文責：気象庁地震火山部火山課 道端秀和)

○教員公募

【茨城大学理学部】

1. 職名・人数：助教（任期なし）・1 名
2. 所 属：理学部理学科地球環境科学領域
3. 応募資格：
 - (1) 理学部におけるフィールドワークを含む岩石学分野の講義・実験・実習等を担当でき、JABEE（日本技術者教育認定機構）認定プログラムにおいても、高度な専門的能力を有する人材の育成を分担できる方。
 - (2) 博士の学位を有し、大学院理工学研究科博士前期課程において講義を担当できる方。
 - (3) 岩石学・鉱物学に用いる（機器分析センター設置の機器を含む）分析機器や実験室を利用し、その管理、保守を分担できる方。
4. 採用予定日：平成 21 年 11 月 1 日
5. 応募締切：平成 21 年 6 月 30 日（火）必着
6. 提出書類：
 - (1) 履歴書（市販のもので可。写真貼付）
 - (2) 研究業績目録（以下のように区分して記載）
 - A. 査読付きの論文（総説を含む）
 - B. 査読のない論文（総説を含む）
 - C. 著書
 - D. 報告書その他の出版物で特に参考になるもの
 - (3) 主な論文の別刷または著書 5 編以内（複写可）とその内容の簡単な解説
 - (4) これまでの研究経過と教育活動（主な野外調査経験、国外・国内の共同研究への参加状況、国際・国内学会での主な講演、受賞、現在までに取得した競争的資金、教育経験など、特記すべき事柄を含めてください。A4 用紙 2 枚程度）
 - (5) 教育への抱負（A4 用紙 1 枚程度）
 - (6) 今後の研究計画（A4 用紙 1 枚程度）
 - (7) 応募者について参考意見をいただける方（2 名）の氏名および連絡先（所属、住所、連絡先、E-mail）封筒の表に「助教応募書類在中」と朱書し、書留にて郵送してください。なお、応募書類は希望されない限り返却いたしませんので、返却を希望される方は、宛名を書いた返信用封筒（切手貼付）を同封してください。
7. 書類送付先および問い合わせ先：
 〒310-8512 水戸市文京 2-1-1
 茨城大学理学部教員選考委員会（地球環境科学領域）
 委員長 安藤寿男 TEL：029-228-8391
 e-mail：ando@mx.ibaraki.ac.jp
8. 参考：
 当学科、領域の概要、メンバー等は、下記ホーム